

蒜山地域の農家の移り変わりを牛飼いを通じて描く

蒜山地域と牛の関係 [真庭市]

蒜山地域と言えば牛のイメージがあります。しかし、牛が多いと言っても、搾乳用のジャージー牛導入はつい60年ほど前のことです。

蒜山地域の景観を語る上での大きな特徴は、広大な草地にあります。蒜山地域の土壌は、火山性のクロボコで、強い酸性土壌です。農作物を生産させていくためには、絶えず土壌改良をしなければならぬ宿命があるのです。そのために不可欠だったものこそ、大量の草でした。毎年春先に枯れた草を焼きます。根までは焼けませんから、気温が暖かくなるとそこから新芽が出てきます。軟らかく、栄養価の高い草になります。その草山に人間と牛と一緒にいき、刈っては牛に負わせて家に持ち帰ります。もちろん牛の飼料ともなりますが、牛の糞と混ぜて堆肥にし、それを田に投入し、鋤き込みます。蒜山地域の田は、一般的な田で使用する草地面積の20倍以上の広さが必要となります。採草のために、山の奥まで牛と一緒に出向くこともありました。

真庭市蒜山郷土博物館館長 前原茂雄「蒜山—自然と人・文化の関係史」（『岡山の自然と文化』40号）より

峰男が中学生の頃までは、蒜山の農家に牡牛であるコットイは欠かせなかつた。田植えや稲刈りの貴重な働き手として、飼い主の手足となって働いた。秋口に刈り集め蓄えた青草は、冬の間の牛たちの食べ物となる。やがてそれは排泄され、ひと冬ひずめに踏みしだかれて発酵し、豊かな厩肥となった。そうやって野の草を牛にこなしてもらった厩肥を積み上げてゆくと、春先には軒を越す高さになりになる。



刈り草を背負う牛